

疫学情報 2016年12月21日

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f7273/#syokunikuEcoli>

食品等の自主回収情報

回収対象品 加熱食肉製品（加熱後包装）30種類

包装形態：合成樹脂袋詰

製造者：有限会社中津ミート（神奈川県愛甲郡愛川町角田230-1）

賞味期限：2016年12月7日から2016年12月15日又は2017年5月29日から2017年6月6日のもの

回収に着手した年月日 平成28年12月10日

回収の理由 平成28年12月1日製造の製品（ロースハムスライス）が、成分規格違反（E.coli陽性）であることが判明したため、同製造所で12月1日以降に製造した他の加熱食肉製品（加熱後包装）も念のため回収します。

想定される健康への影響

健康被害の可能性は極めて低いと考えます。なお、平成28年12月13日現在、健康被害の届出はありません。

報告した事業者の名称 有限会社中津ミート（神奈川県愛甲郡愛川町三増1228）

問合せ先 有限会社中津ミート 電話番号：046-285-3187

受付時間：10時から17時45分（土日祝は除く）

返品方法（回収方法）

販売店及び有限会社中津ミートホームページ上で告知

ハザードラボ「県によると今月5日に横浜市が検査したところ、ヒトやブタの腸や糞便に生息する大腸菌「E.coli」が検出された。E.coli そのものには病原性はないと考えられており、県では健康被害の可能性は極めて低いと見ている。」

<http://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/about/info/news/news2269.html> 2016年12月08日

国立大学法人長崎大学(以下「長崎大学」という。)が、計画を進めている高度安全実験(BSL-4)施設を中核とする感染症研究拠点整備に関する検討を行うにあたり、検討状況に関する情報の地域住民への提供を行うとともに、地域住民の安全・安心の確保等について協議するため、長崎県、長崎市及び長崎大学が設置する感染症研究拠点整備に関する連絡協議会(以下「三者連絡協議会」という。)に、長崎大学における感染症研究拠点整備に関する地域連絡協議会(以下「地域連絡協議会」という。)を、設置いたしました。

その第8回会合を下記のとおり開催いたしますのでお知らせします。

記

○ 第8回長崎大学における感染症研究拠点整備に関する地域連絡協議会

1. 日 時 平成28年12月15日(木) 17:00~19:30
2. 場 所 長崎大学医学部良順会館専斎ホール(1階)

<http://www.nipr.ac.jp/info/notice/20161216.html>

大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立極地研究所

日本の南極観測史上初、新種の菌類を発見 2016年12月16日掲載 2016年12月19日更新  
国立極地研究所（所長：白石和行）の辻雅晴 特任研究員を中心とする研究グループは、南極・昭和基地のある東オングル島での菌類の多様性調査の過程で、新種の菌類2種（図1）を発見し、*Cystobasidium tubakii* と *Cystobasidium ongulense* と名付けました。この2種は氷点下でも成長が可能であることに加え、生育にアミノ酸やビタミンを必要としないことから、南極のような、低温で栄養素が限られた環境での生育に適応した種であることが示唆されました。菌類の新種の発見は60年に及ぶ日本の南極観測史上、今回が初めてとなります。

研究の背景

菌類は世界中で約10万種報告されており、多様性に富んだ生物です。菌類は有機物の最終分解者であることから、生息地の炭素循環や土壌の形成に関与しています。さらに、南極のような貧栄養の環境では、地衣類などの光合成生物の定着にも関与していると考えられていることから、菌類は物質生産にも大きな影響を及ぼしていると考えられています。しかし、南極域に生息している菌類は約1000種の報告にとどまっており、さらに日本の南極観測の拠点である昭和基地周辺に限ると、わずか31種が報告されているだけで、昭和基地周辺にどのくらいの種類の菌類が生息しているのかもはっきりと分かっていません。そこで、研究チームは昭和基地がある東オングル島全域でこの島に生息する菌類の大規模な調査を行うこととしました。

研究の内容

東オングル島の土壌試料は、第49次南極地域観測隊の伊村智隊長（国立極地研究所 教授）と観測隊同行者の辻本恵 国立極地研究所 特任研究員（当時：総合研究大学院大学）が、土壌細菌の調査のため、2007年12月から2008年1月にかけて東オングル島全域にわたる226の地点から採取し（図3）、日本に持ち帰っていました。

2015年11月に辻 特任研究員が冷凍保存されていた226の試料から菌類の取得を試みたところ、合計で293株の菌類が分離されました。さらに、分離された菌類に対して26SリボソームDNA（注1）などの塩基配列を用いた系統解析を行った結果、新種の担子菌酵母（注2）2種を発見しました。日本の南極観測の歴史の中で、新種の菌類が発見されたのは初めてのことです。

発見した新種は日本で最初に南極の菌類を報告した故・椿啓介教授（注3）の名前と、東オングル島にちなんで、それぞれ *Cystobasidium tubakii* と *Cystobasidium ongulense* と名付けられました。これらの新種について、詳しい生育の特徴を調べた結果、両種ともマイナス3℃という氷点下でも成長が可能であることが分かりました。また、南極以外で発見された他の *Cystobasidium* 属菌では、成長にビタミンが必要であるにも関わらず、これらの新種は生育にアミノ酸やビタミンを必要としないことが分かりました。これらのことから、今回新たに発見した2種は南極のような低温かつ栄養素の限られた環境での生育に適応した種であると考えられます。

今後の展望

極地に生息している菌類の中には、低温で活性の高い酵素を持っているなど、極限環境を生き

抜くための優れた特徴を有するものがあり、微生物資源としても注目されています。今回、発見した新種の菌類は低温でも脂質分解酵素などの菌体外酵素を分泌します。これらの特徴が産業利用できる可能性について検討する予定です。

また、昭和基地周辺の陸上生態系は未知の部分が多く残されていることから、次世代シーケンサーを利用し、49次隊などで採取された環境試料に含まれる菌類や細菌、微小動物の多様性の解明も試みます。並行して土壌成分の分析も実施し、その結果と昭和基地周辺の菌類を含む陸上生物の多様性の結果を元に、この地域における陸上生態系の全体像の解明を目指します

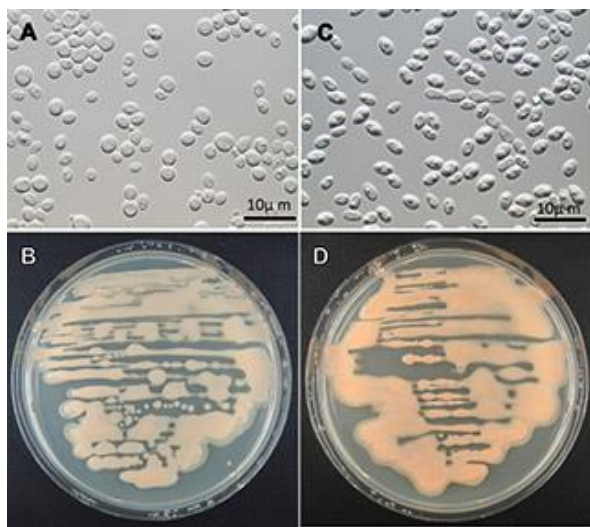


図1： *Cystobasidium tubakii* (AとB) と *Cystobasidium ongulense* (CとD)。A. *C. tubakii* の顕微鏡写真、B. YM寒天培地で15℃、10日間培養した時の *C. tubakii* のコロニー。C. *C. ongulense* の顕微鏡写真、D. YM寒天培地で15℃、10日間培養した時の *C. ongulense* のコロニー

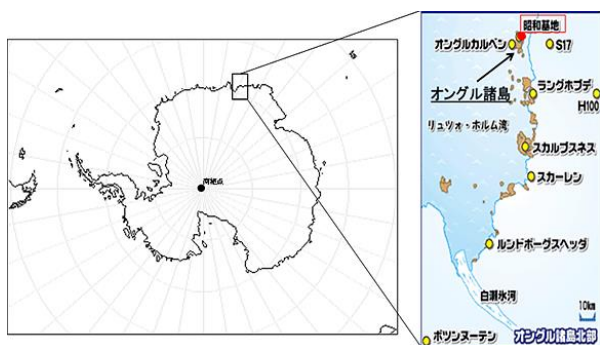


図2：東オングル島と昭和基地の位置（左図上の赤丸）



図 3 : 49 次隊での試料採取のようす (辻本特任研究員提供)